



橘さん家ノ愛人事情
～幕間～

猪熊夜離

目次

橘結花はマゾ雌の素質がある	3 ページ
橘結花は強い雄に屈服したい	14 ページ

橘結花はマゾ雌の素質がある

とあるマンションの一室で橘結花は男のアナルを舐めていた。

男は結花の母親である京香をベッドに仰向けで寝かせ、自分は床に立った状態で彼女の秘部を硬く尖った勃起で突いている。四十代も後半に差し掛かり二人の実娘は社会人になったが、未だ三十代前半に見られる若々しい容貌の京香をちんぼで喘がせながら、その娘にアナル舐めを命じる男なら夢のようなプレイを刈谷篤史は堪能していた。

「あっ♡ あっ♡ い、いっっ、いっっ、篤史さん♡ ああっ、ああっ♡」

夫に早く先立たれ、女手ひとつで二人の娘と途中からは同居人の男の子も育て上げた京香は、凜とした美貌も相まって強い女に見られる。かつて彼女の下で働いた男たちは、いずれも京香に一晚でもお相手してもらえないだろうかと夢見たが、彼女の隙のない立ち振る舞いや並の男以上に頼りになる有能さに尻込みした。

唯一ハメを外した瞬間があるとしたら、仕事で面倒を見ていた若い社員が大きな成果を上げた祝いに二人で飲みに行き、テンションが上がった流れでホテルに入ってしまったことか。しかし、そのときも直前で京香が我に返り、口と手でしてあげただけでセックスは

しなかった。

亡夫に操を立てる京香が夫亡き後、再びセックスしたのは橘家で面倒を見ていた少年ユウの筆下ろしだった。幼いころ両親を亡くしたユウは祖父と一緒に橘家の近所に住んでいた。昔からよく知る少年で娘たちとも姉弟のように育った。

「あんっ、あんっ、あんっ！ やっ、ああんっ♡ あなたっ、あなたっ、あなたあっ♡」
「どうした京香。気持ちいいのか」

「きもちいいの……もっとほしいっ……」

「何が欲しいか言っご覧。おねだりして」

京香は躊躇いも恥じらいもなく叫ぶ。「おちんぼ！ 篤史さんのおちんぼ欲しい！」

彼女の下で働いてた男たちも、長くひとつ屋根の下で暮らすユウも信じられないだろう。あの橘京香が禁断の四文字を口にして、自分からセックス請いするなど。だが気を張って強い女に見せてるだけで、彼女の本性は人一倍淫らな肉欲を秘めたスケベ女だ。

イニシャルと同じKカップの爆乳が男のピストン運動に合わせて揺れる。眼福の光景にイヤらしい笑みを浮かべながら刈谷の突き上げが力を増す。

「篤史さんのちんぼ、ちんぼがほしいですっ！ あふッ♡♡ アッ、アッ、アッ！ また硬くなっ♡」

「京香の綺麗な顔から、おちんぼなんて言葉が出てくるだけで男なら百人力さ。結花も献身的にアナルを舐めてくれるしね。左右の手で尻たぶを開いて、もっと奥深くまで舌を捻じ込みたい。鼻先を擦りつけるように顔ごと押しつける」

言われたとおり結花は顔を突き出す。母親譲りの鋭さを宿した美貌で学生時代はクールビューティとも評された。数々の男の注目や欲望を集めた美女の顔が中年男の尻の谷間に消える。

結花のパブリックイメージは一言で言って、気が強くて生意気そうな女だろう。彼女は京香以上に外面を作り、家の外では常に周囲を威嚇して壁を作るタイプだ。父親を早くに亡くし、母親の京香は仕事で多忙を極める、おっとりした妹・小春は自分が守ってやらねばと強化外骨格を身に着けた。

その実、結花の本性は自分より強い相手に支配され、乱暴に扱われることに悦びを見いだすドM気質。数多の男を袖にしてきたことで男嫌いでは？ 百合なのでは？ と噂されたが、彼女に一度振られただけであきらめる男は知らなかったのだ。

橘結花が『強気でSっ気ありそんな女ほど実は男に隷属したがってるドM女』の典型であることに。

もしも彼らに力尽くでも結花を物にしてやろう、生意気女に男の強さを見せてやろうと

いう気概あれば、アイドル顔負けの美貌とグラビアアイドルも裸足で逃げ出す爆乳の美少女をセフレにして、アナル舐めさせることだって可能だったかも知れない。

だが、そうはならなかった。

軟弱な量産型イケメンどもが死屍累々と積み上げられた裏で、結花を墮とすことに成功したのは彼女をひとりの人間や女性として扱う男ではなく、ちんぼ入れたら気持ちいい肉穴としか見做さないケダモノたちだった。

結花にM氣質を自覚させたケダモノたちが司法の手で姿を消しても、芽生えてしまった被虐の悦びまでなかったことにできない。

ユウとの幸せなセックスでは満たされない心と体の隙間に刈谷が侵入してきた。彼は数年前に橘家の女たちが輪姦レイプされたときの動画を手にし、三人に自分の愛人になれと迫ってきたのだ。

ユウが家を空けてる隙にまず京香が墮とされた。次いで結花も刈谷とのセックスに墮ちた。年齢を感じさせない力強さと豊富な経験からくる老獪なテクニク、そして動画を見ただけで見抜いた結花のM氣質を突いてくるプレイに結花は抗えなかった。

ユウとの優しいセックスは幸せな気分させてくれる。あの穢れた一夜を過ごしたあとでも、自分には人に優しくされ、愛される価値があるのだと感じさせてくれる。それでも

悲しいかな橘結花の本性は尊厳を奪いたがってもらってるマゾなのだ。

せっかくユウが回復してくれた自尊心を、結花は刈谷とのセックスで消費する。大きなちんぽに負けて愛する人を裏切るバカ女。最低の称号が最高に気持ちいい。

排泄の穴を舐めさせられる屈辱的なプレイにも、彼女の本質はマゾの悦びを得てしまう。「ちゅばっ、ちゅうちゅう、れるおん……むちゅっ♡ るえろおるえろお♡ アンタだって気持ちいいんでしょ。お尻の穴ヒクヒクしてるわよ。さっさとイキなさい……ぺちゃ、んぢゅうううう、れるおっ♡ れろお、れるおっ♡」

「イッたら次は自分がちんぽ挿れてもらえるから張り切ってるのかな」

「はあ？ 違うわよ、馬鹿なこと言ってるんで、早く射精しなさい。母さんが大変でしょ。今晚もう三回目なんだから」結花はあきれたように言いながら目の前で揺れる刈谷の陰囊を掴む。部屋に響いていた、ぺちぺちという音が止む。

「デツかい玉ね。どんだけ精子詰め込んでるのよ」

「くうくうっ、玉揉みアナル舐めまでしてくれるなんて、結花は最高の愛人だよ」

「うっさい」

個人的な感情を抜きにした評価で言えば、結花は自分に菊の御門を舐めさせてる相手が、優秀な雄であると認めぬ訳にかなかった。容姿は十人並みで、いままで言い寄られた男

どもに比べれば平凡だけでも、それだって別に悪いというほどではない。財力はユウが社員として働いてる会社の他にも幾つかの事業を手掛け羽振りはいいいようだ。

「あまりにも儲かりすぎるので税金対策で新しい会社を作ったんだ。僕の愛人ばかり働かせてる所だけ給料や福利厚生は普通の会社並みに設定してるし、君たち三人も働かないか」
今日セックスする前、刈谷はそんなことを提案してきた。

要は給料の名目で愛人にお手当てを払うための会社だ。

結花は悪くないと思った。どうせお手当てをもらうにしても自動で振り込まれるより、形ばかりでも仕事をした対価として受け取るほうが気は楽だ。ユウとの子供を妊娠する前に勤めていた会社には戻りにくかった。

まだ新入社員のうちに急な——結花的には計画どおりだったが——妊娠で産休・育休をもらい、同期とすら十分に知り合えてなかった。戻っても味方はおらず、ただただ入社早々に生エッチで無計画に子供を作ったヤリマン糞ビッチと陰口を叩かれるだろう。

それを思えば全員が刈谷の女という共通点を持ち、何らかの事情あることを察してくれる環境のほうがストレスなく働けるのでは？

施しは受けないと強がってみたところで、子育てにお金が必要な現実を覆せない。刈谷の策謀により——それだけではなく結花たちも望んだ結果として——ユウは三人の内縁の

妻と三人の子供を持つパパになった。

まだまだユウは若手社員。彼の稼ぎだけで七人家族を養うのは無理だ。不自然なポーナスや昇給は周囲にもユウ本人にも怪しまれる。となれば無茶苦茶な愛人契約をさせられた刈谷から、貰えるものは貰うしかない。

容姿は問題なし、財力は◎とくれば残すは女を満足させられるか——セックスの強さだが、これこそ刈谷の最も優れた点だ。この男に抱かれて気持ちよくない女がいるのかと思うほど、結花は刈谷と寝ると頭真っ白になるまでイカされる。

いまもフィニッシュを間近に控えて、京香は結花でも聞いたことがない荒々しく、あけすけで、みっともない、それでいてか弱くて可愛らしい、男に敗北する悦びを教え込まれてダメになってしまった女が放つ快感の咆哮を上げていた。

ナンパ男たちに輪姦まわされた夜でも、ついで京香はこんな声を出さなかった。快楽に流れみっともなく喘いでいても、根底にはこのままじゃ終わらない、お前たちの言いなりにはならない、いまに見てろと反抗する心が滲んだ。初対面の男たちには分からなかったろうが、橘京香の娘を二十年もやってる結花には分かった。

そうした反骨心が刈谷に鳴かされる京香からは感じない。

「あふっ♡ 篤史さん♡ もっと♡ もっと突いてください♡ 奥まで♡ あああっ♡

あああん♡ おちんぼ気持ちいいの♡ あふう♡ もっと、もっとおあひっあひいあひい
いん♡」

完全に二人の格付けは済んでしまった。この序列が覆ることは一生ないのだと結花は感じた。

あんなに強くて、格好良くて、遅しく見えていた母が、刈谷の下では彼に媚びてちんぼを出し入れしてもらおうしか考えられなくなってしまう。

それは結花にも同じことが言えた。

刈谷の陰囊を揉みしだき、苦い腸壁を舐め回しながら結花の頭にあつたのは、先ほど刈谷に言い当てられた想い。

（早く射精して母さんもイカせなさいよ、それで次は私とセックスするんだから、おっきなちんぼでおまんこズボズボしてもらわないと体が火照って寝られないのよ！）

「あっ♡ ああッッ♡ あ、ああッ♡ イくらッ♡ イっくッッ♡」ひと際甲高く京香が鳴いた。

結花も舌先をドリルのように尖らせる。刈谷の尻の割れ目に顔を密着させ、舌が届く最深部まで舐め回しながら男を追い詰める。

「イッちゃえ♡ 親子くらい歳が離れた小娘にお尻の穴ほじられて、女の子みたいに腰ビク

ンビクンさせながらイッちゃえ♡ んふうッ♡ ちゅぶ、んむう……♡ んッ♡ ふう—
—ッ♡ ふう——ッ♡ んんむあッ♡ んふ——ッ♡」

京香の締め付けと結花の熱心な舌ドリル。前後から押し寄せる美人親子の射精懇願には、然しもの刈谷も抗えなかった。

「出るよ京香。結花も最後までアナル啜って」

「ん——ッ♡ んあ——ッ♡ んぶっ♡ ふぶうッ♡ んうッ♡ んんッ♡♡♡ ちゅ
ばッ♡ ちゅ……れろおう……♡ ずじゆるッ♡ ずじゆるるるるるるるッ♡♡♡」

刈谷の尻に力が入ってアナルもギュうっと締まる。結花の舌は男の肛門括約筋に絡め取られた。

そうしてるうちに刈谷は腰の動きを止め、か細く「あっ、あっ、ああ〜〜〜」とため息混じりに吐き出しながら、京香のナカに精を搾り出す。

長く続いた射精が終わると、刈谷は引き抜いたちんぽを跪く結花の眼前に向ける。アナル舐めに適した顔の位置はフェラチオにも最適だ。彼は精子溜まりがパンパンに膨れあがったコンドームを外すと、精液で汚れた龟头を結花に向ける。

むわあっと鼻先に発生した精臭に頭がくらくらする。これだ、これが反則なのだ、彼の体液には媚薬の成分でも混ざってるのではと思うほど、女を効果的に発情させてしまう。一

般的に言って精液の臭いが良いにおいのはずがないのに、ずっと嗅いでたくなってしまう。何を言われるまでもなく結花は刈谷のちんぽを啜えた。初めてのときは苦しくて涙目になったデカチンも、すっかり慣れて喉奥まで飲み込める。喉輪を締めて亀頭に気持ちよくなってもらいながら、幹には舌を這いずり回らせる。

こそげ取った精液をゴキユゴキユ飲み下した。アルカリ性の体液は独特な苦みがある。精液が美味しいなんてフィクションだけの話だと思っていた。だけど何度も飲んであげるうち、刈谷の精液を飲むことに抵抗がなくなり、最近これはこれで味わい深いのかもと感じるようになった。

思えば大人の味覚と呼ばれる物の大半は苦みが強い。ビールだって山菜料理だって苦みを楽しむものだ。

精液の味を知って女は大人になるのかも知れない。

「ちゅぷっ……♡ んんっ……♡ あむっ……♡ はむふう……♡」

献身的に尽くす女を労ってか刈谷の手が結花の頭を撫でた。くすぐったくて身を振ると彼の手は耳に下りてくる。すりすりとお指で耳を擦られるだけでなぜ、こんなにも気持ちいいのか。背筋に官能が走る。

「んう……♡ れろっ……♡ ちゅぱっ……♡ んふ……♡ じゅるっ……♡ は

ぶっ……♡」

「結花は言葉がキツくても優しいね。他の女で射精したちんぽを丁寧に舐めてくれるんだから。早く自分に挿れて欲しいだけかな」

「んう♡ フーっ♡ フーっ♡ 分かっているなら硬くしなさいよ、ちゅちゅ♡ んんっ、ちゅっ♡ ちゅっ♡ はむ♡ んう♡」

射精直後なお七分勃ちを維持していた刈谷のちんぽが、結花の口の中でムクムク成長する。顎が痛いくらい太い幹を吐き出した。

「立ち上がって洗面所に行こうか。いつもどおり鏡の前で立ちバックしよう。結花は気持ちよくなってる自分の顔を見ながらされるのが好きだろ」

見透かした男の物言いに結花は黙って頷く。大きなお尻を揺らしながら率先して部屋から出た。

橘結花は強い雄に屈服したい

移動の間も結花の体は疼きっぱなしだった。左右の足を交互に送る動作だけで、ぐじゅぐじゅに蕩けた姫割れの肉が擦れ、一步毎に振動が子宮を切なく揺する。

興奮に心拍数は跳ね上がり、息苦しくて鼻呼吸では追いつかず口を軽く開け、はっはつと盛った犬のような音を出す。

平常心を装いたいのに歩調は知らず知らず早歩きになった。

やっとの思いでたどり着くと自分から洗面台の縁に手を置き、尻を突き出してアヌもヴァギナも全開にしながら男を待つ。男にちんぽを挿れてもらうためだけの体勢。あなたのちんぽで頭おかしくなるまで掻き混ぜてもらいたいのだと告げる、雌犬の姿勢で雄の到着を待つ。

頭がおかしくなるまでと言うなら、とっくにおかしくなってる。男のアナルやちんぽを舐めさせられていたときから、頭の中はぐつぐつ煮えたぎってフットーしそう。昔、インフルエンザで四十度近い熱を出した時のような熱さだ。

廊下の向こうから足音が近づいてくる。ゆっくり。一歩ずつ踏みしめるように。焦らしてるんだ。ほんと嫌なやつ。私が我慢できなくなってること分かってて、ちんぽのことしか考えられない時間を少しでも引き延ばそうとしてる。

結花は口の中でフル勃起硬度を取り戻した刈谷のちんぽを思い出す。あれがまた入ってくる。経産婦おまんこでもキツイサイズのデカチンが。みしみし骨盤が悲鳴を上げてねじ込まれる。

これからされることを考えただけで待ち遠しさに乳首が痛いほど凝った。

あー、分かっているから嫌、これから自分がどうなっちゃうかなんて考えるまでもない。あれが入ってきたら一瞬で何も考えられなくなって、そこから先は「あん♡ あん♡」鳴くしかなくなるんだ。

自分が弱い女で、強いちんぽには逆らえない、デカチンに躡けてもらいたがってる雌だと思いき知らされてしまう。

近づいてきた足音が洗面所に入ってくる。歳の割には引き締まった刈谷の体は、うっすら汗を掻き電灯の下で光った。男のくせに勃起させちゃった乳首をおかしく見ながら視線を下に転じると、おかしみなど微塵も湧いてこない本命の勃起が嫌でも結花の目を釘付けにした。

負けました。腹の奥で子宮が泣いて土下座して許しを請いながら、敗北の証にどろっどろの本気汁を出してくる。まだ触れられてないのに彼の視線にさらされただけで内ももがベタついた。

「いい子で待ってたね。さっそく挿れてあげる」

コンドームの包を破る刈谷に必要ないと声をかけそうになり、はっと結花は我に返る。

いま何を言おうとした？ ひょっとして生で欲しいなんて思わなかった？

刈谷の命令で三人はユウとの子供を産んだ。男は守るべき家族がいてこそ仕事に集中できる、彼には幸せな家庭を築いてもらいたいと刈谷は三人とユウの関係を後押しした。だが、それはそれとして美人親子を自分の物にする欲望もあきらめず、先にユウの子供を産んでから自分との愛人契約を履行するよう迫った。

現在は出産を終えた母体の健康を考え、三人の体に休息期間を設けている。

短期間の連続した出産は母子の健康に悪影響がある、ユウとの子供を産んでから一年間は避妊セックスしかしないと刈谷のほうから申し出た。

橘家の女たちにとっては願ったり叶ったり。不幸中の幸いとも言える申し出のはずだった。避妊セックス期間中に刈谷の心変わりがあるかもしれないし、そうじゃなくとも事故や事件で彼がこの世を去る期待もゼロではない。

もう二度と、ユウ以外の精子で妊娠なんかしたくない。三人の共通した思いだったはずだ。

結花はナマでして欲しいと言いかけた自分に愕然とした。いずれすることになるとはしても、自分から求めるはずないとスタート時点では疑ってなかったのに。

まだ刈谷に抱かれてない小春はともかく、すでに彼の味を知ってしまった結花と京香は、最初に取り決めた避妊期間を煩わしく感じ始めていた。

女性として子供を埋めるタイムリミットが迫る京香は娘よりも顕著だった。結花が刈谷と会う日に付き添い、自分も一緒に抱かれることを望むまでに堕ちた彼女は、果たして四十路の体がいつまで子を成せるか不安に駆られていた。

いつだったか刈谷に激しくイカされたあと、失神した風を装って京香と刈谷を二人きりにさせてみた。若い結花がグロッキーになるほど動いたというのに刈谷は少しも休まず、近くで順番待ちしていた京香に即ハメした。すぐに母は淫らな女の声を上げ始めた。

「ああああ、すごいっ！　すごいわ篤史さん、いま結花としたばかりなのに♡　んっ♡　ふっ♡　ふっ♡　んっ♡　はあっ♡　篤史さんのちんぽ……とつても、遅しいわ♡」

性欲絶倫魔人の刈谷は結花と京香二人がかりで相手しても朝まで打ち止めにならない。それどころか先に二人のほうが疲れて休ませてくれと音を上げてしまう。

若さに任せた性欲とも違う、生まれながらにセックスが強い生き物。

セックスモンスターに突かれながら、娘は氣をやってると信じる京香が思いがけないことを言い出した。

「篤史さん、コンドーム外しましょう。結花が寝てるいまならナマでしてあげる。私、今夜は発情してるの。橘つばきの女は皆こうなのよ。危険日が近づくと孕ませてもらいたくて疼く。夫に種を貰ったときも、あの男たちにヤラれたときも、ユウくんユウと子作りしたときも、この感じだった。いまなら篤史さんの子供百パーセント埋めるわ」

結花は驚いて動けなかった。ここにはいけない気がして息を止めようとしたが、イレギュラーな行動は氣づかれてしまうと思い直す。寝たふりを続けた。背中越しに二人の会話に耳をそばだてた。

結局そのときの申し出は刈谷のほうから断った。年齢が氣になるのは分かるが高齡出産だからこそ、母体の調子を整えて望まないと不測の事態が起きると諭された。刈谷に夢中な京香は彼の言うことに従う以外なかった。

刈谷のちんぽが0・01ミリの薄皮を纏う様を眺めながら、結花は息を殺して過ごした夜を思い出す。

あのときはまだ京香の考えが理解できなかった。いまは子供云々は置いて——置いて

ておける議論ではないのだが——コンドームが邪魔だ、生ちんぼ挿れられたら気持ちいいだろうなどは共感できた。

「お待たせ」

刈谷が結花の背後についた。ピタッと入り口に当てられると、やはり避妊具の分だけちんぼの生々しさが減じる。なんて野暮ったくて無様なセックスなんだろう。肌と肌を直に擦り合わせるほうが何倍も気持ちいいって知ってるのに、妥協の産物で我慢しようとしている。こんなことを考える時点で頭おかしくなってるのだと思っても、自分では止められなかった。

「待たせたと思うなら精々気持ちよくさせなさいよ。埋め合わせしないと許さないんだから」

我ながら可愛くない台詞が口をついて出たものだ。げんなりしてしまふ。だというのに鏡に映る刈谷の口元がニヤついていた。

「結花は突き放した言葉だと思ってるかもしれないけど、その言い方だと僕のちんぼ待ってたから、いっぱい気持ちよくして欲しいとしか聞こえないよ。態度はツンツンしてるのに内容はデレデレだよね」

「……うっさい」

自分が何を言ったか振り返る。指摘されたように聞こえなくもない。そんなつもりはなかったと慌てて言い訳するのは、それこそ無様だろう。

何より言い訳などさせるつもりがないようだ。硬いちんぽが結花の入り口をこじ開ける。弱い粘膜を擦り上げながら奥に、奥に入ってくる。

彼の切っ先が行き止まりを捉え、コツンと二人の体がぶつかるだけで結花は自然と涙をこぼした。ダメだと思ってるのに体が満たされると心まで満たされてしまう。決してユウが与えられない、自分以外の強い者に隷属して生きる安心感、この人の腕の中でなら気を張ってなくて良いんだと感じられる包容力がある。

幼いころに父親を亡くし、妹の小春はぼわぼわしたところがあり目が離せない。本当は人一倍甘えたがりで弱い人間なのに、家の外に向かつてはしっかり者で気が強い姉を演じねばならなかった。

京香は普通の家なら手分けできる父親役と母親役を一人で担っていた。甘えて負担を掛けるわけにいかないと子供ながらも感じた。ただでさえ忙しい母さんの手を患わせてはいけない。

余所の家の子が両親に我が儘を言ったり、困らせたりする姿を見るのは羨ましかった。世間の女の子は思春期ともなれば父親を臭い、汚いと毛嫌にするものらしいが、結花には倦

厭する対象がいなかった。

刈谷に対して結花が感じる安心感や、素直に言うことを聞くのは癪だと感じる気持ちには、取り繕わない感情をぶつけられる年上の男性を得た彼女が十年越しに迎えた反抗期が含まれてるかも知れない。

もっとも、普通の親子は互いの性器や尻穴まで見せ合い、舐り合い、あまつさえ結合しはしないだろう。セックスで父親が娘に男の強さを教えるなんてことはない。

「あんっ、奥まで、入ってくる……っ♡」

「鏡に映った結花の表情とってもエッチだよ。自分でも見てみな」

「——っ、ふ、ふッ♡ お、おねが、み、見ないでッ」

「完全に僕のちんぽに堕ちちゃった女の顔だ。恥ずかしがることないよ。みんな最後はこの顔になるんだから」

「こんなの、たいしたこと……ああ、ちんぽかたっ……堕ちたりしてない……脅されて、従っ
てるだけで、好きになったりはしてない……♡」

「結花は強情かわいいなあ。ほらキスしながら突いてあげるから顔こっちに」

「……ん、あむっ♡ れろお♡ 口の中、舐め回され……んふう♡ んぐっ、ちゅっ、ぢゅ
るっ……んぷっ♡」

「結花は好きでもない相手でもキスハメされたら感じる淫乱なのかな」

「ちがっ！ ふっ、うう……そんなことは、なあっ……ちゅっ、んっ♡ ぢゅっ♡ ぢゆるるっ♡」

「答えたくないからってキスに逃げちゃった。僕は気持ちいいから良いけどね」

ああ言えばこう言う刈谷の追求から逃れるため、結花は深く激しいキスを繰り返す。片時も彼の唇を放さず、吸い付いていれば軽口は封じられるものの反作用で結花の体は火照りの具合を増す。

彼の手で抱き起こされた上体を限界まで捻ってキスする。無理な体勢でするセックスは余計に気分が盛り上がる。膣内で刈谷の勃起は一突き毎に硬度を増していた。

彼に唇を吸われ、乳房を手で掬われながら、密着した体勢で深いところまで亀頭を届けられる。お腹の中の圧迫感が強い。お尻を突き出した姿勢とは違う場所にちんぽが当たる。カリ高な出っ張りが肉襞を引っ掻いた。亀頭が何度も子宮口を叩く。

「ああ……これも、すごいっ……」本心を隠す余裕もなくなり、結花は刈谷の男らしい腰使いに感嘆する。口腔粘膜を舐め回しながら突いてもらうのが気持ちよくて、自分からキスハメをねだる。「むちゅ……う、んう……ちゅッ♡ ちゅッ♡ ちゅぶッ♡ は、あむう……う♡」

女が自分との行為で夢中になって快感を貪る姿は男心にくるものがあるらしい。ますます結花を悦ばせてやろうと刈谷の動きが激しさを増す。前後のグラインド運動に体を揺さぶられ、汗や愛液の飛沫が辺り一面を汚した。いまや内もどころか足首まで己の分泌液で汚しながら、その卑猥さすらも結花は性的な興奮に変えて昂ぶっていく。

「キスしながらの立ちバックはキツそうだね。選んでよ。キスなしで後ろからパンパンされてイキたいか、向き合った体勢でキスしながらイクか」

どっちを選んでも私の選択を冷やかして遊ぶつもりでしょ。ムカつく。本当に嫌な男。「アンタ忘れてるかも知れないけど、さっきまで私はアンタのお尻の穴を舐めてたのよ。そんな口でキスされて嬉しいものなの」

「ちゃんと準備はしたし。それに、結花に舐めさせておいて、自分は嫌がるのも不公平だろ」世の中にはフェラチオさせておいて、その口でキスされるのは嫌がる男もいると聞いたので、ましてアナル舐めなんて嫌だろうと思って質問したのだが、飄々と返されてしまった。「僕が嫌じゃなければキスしたいの？」

そんなこと面と向かって聞かないでよ。結花は顔を逸らして俯く。洗面台についた自分の手を見た。鏡は直視できなかった。いまは自分の顔を見たくない。

答えるより先に刈谷のちんぽが抜けた。

体を反転させられる。向かい合うと彼の手が、ひょいっと結花の体を持ち上げた。力強い。男の人の逞しき。好き。

洗面台に浅く腰掛けさせた結花を刈谷が正面から貫く。再び入ってきた剛直の逞しきに結花の脚がピンと伸びた。その脚を彼の腰に回して、腕は首の後ろに縋り付く。ぎゅっとしがみ付くと骨格レベルで女とは違う男の体にドキドキが止まらない。

いまからされちゃうんだ。どんなに強がって憎まれ口を叩いても、ちんぼ挿れられたらこの人には勝てませんってわからせられる躰の時間。お互いの顔を見ながら粘膜擦り合わせて、誰に負けたかはっきり覚え込まされる。

ズクンと遠慮ない挿入が最深部まで達する。結花の両手足が強張る。

「あああ〜ッ！ は、ああ、ああッ！ ふかッ、うああッ」

「結花の締りがよくて気持ちいいよ。結花は苦しいのが好きだから行き止まりを圧迫して、内蔵を押し上げてやると締りがよくなるんだよね」

自分のマゾ性を指摘されながら突き上げられる。違うと否定したいが言葉どおりの動きを実践されると、結花の体は簡単にスイッチが入り腔壁をうねらせてしまう。

「お、おかし、ああんっ♡ こんなんされたら……狂って……奥、ぐりぐり、らめっ♡ うごっ……うごかないでっ」

発情した体の熱で理性はぐずぐずに蕩けていた。結花は自分からも腰を振る。すでに思考は前後不覚に陥り、いま、この瞬間、気持ちいいことしか分からない、したくない。快樂を求めそのままに体が動く。

「この体勢を選んだんだからキスしよう。キスハメでイカないと損だよ」

刈谷は顔を近づけるが最後の一线は越えない。したいなら結花のほうからキスしに来なさいと告げている。齧りつくように唇を重ねた。

「……ふうっ♡ じゅるっ、んちゅうううっ」

二人の間で結花の豊かな胸が潰れて形を変える。汗で濡れた体を擦り合わせながらちんぽを出し入れされ、結花は何度も小さな絶頂を繰り返す。

「ふうううっ……♡ んううっ……♡ んふうううっ♡」

イクたびに腔内が射精をねだって締まる。刈谷も結花が軽イキしてることは気づいてるだろうに、まったく抽送を緩めず繰り返し続けた。体の内側で暴れる他人の一部に自分の意識が支配されるのは、痛いような、甘いような、幸せでありながら悔しいような、複雑な感覚があつて一言で言い表せない感情に結花は身悶えた。

もうダメ、何回イッたかも数えてられない、最後に一番デッカイやつで飛ばして欲しい。

「はづっ♡ づっ♡ はっ、あっ♡ ああああっ♡」

みっともない鳴き声が降伏宣言となった。

上と下の両方を犯され、頭が真っ白になる結花を刈谷がフィニッシュに向かって突き上げる。おまんこの感触を楽しむピストンから、性急にゴールへ導く動きに変わった。

イカせてくれるんだ。一番気持ちいいやつしてくれるんだ。ありがとう、ありがとう……。
「深いところに押し付けながら出すぞ」

「——ふ、ぐううッ！ はッ、ああッ、あッ！ いくつ、イぐうぐッ！」

深いところという言葉に反応して、ありったけの力が結花の両脚に込められた。膣内の蠕動運動も射精欲の限界で震えるチンポを最深部へ招く。

刈谷の尻や前立腺に力が入る。睾丸がきゅっと吊り上がって彼は射精した。

結花は快楽の荒波に振り落とされないう彼にしがみつきながら、自らの体内で暴れる雄棒を感じ取った。

「結花がイッてる姿はかわいいね。……興奮するよ」

すでに今晚五度目の射精だというのに刈谷の性欲は一向に衰えない。キラつく眼光に見つめられる。今日も眠れない夜になりそうだと結花は覚悟を決めた。

著者名 猪熊夜離
発行日 2022年 5月 7日
Twitter @inokuma_yoga

